山静学友会　会誌特別企画

国際ロータリー5280 地区ガバナー・デジグネート　中曽根牧子様独占インタビュー

皆様、こんにちは。今回は、本邦初の山静学友会誌特別企画をお送りしたいと思います！

ロータリークラブは学友からすると近いようで以外と知らないことも多い存在です。せっかく近くにいるのに知らないのはもったいない、そんな気持ちで今回は学友の中のロータリアンに着目。その中でも、なんとこの度学友から米国の地区ガバナーが輩出されようとしているというお話を聞き、是非にということで独占インタビューをさせて頂きました。

学友として留学した際の経験とその後のキャリア、普段は聞けない地区ガバナー選出のプロセス、そして財団への感謝の想い、大変貴重なお話をたくさんいただきましたので、ぜひご一読ください。

******

中曽根牧子氏　プロフィール

山静学友会員であり、国際ロータリー5280 地区（米国カリフォルニア州）の地区ガバナー・デジグネート（District Governor Designate（ＤＧＤ）、2023-24 年度にガバナーを務める予定）。

東京外国語大学卒業後に、甲府ロータリークラブ（RC）から、1982-1983 年財団国際親善奨学生として当時の西独フライブルク大学に留学（ドイツ史専攻）。その後、カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校でジャーナリズムを専攻。帰国後は日本リーダーズ・ダイジェスト編集部、豪シドニー・モーニング・ヘラルド紙東京支局を経て日本経済新聞東京本社に勤務。

日系アメリカ人三世のご主人と結婚後、米国に移住し、日経アメリカ社ロサンゼルス支局で記者として活躍。出産を機に退職。その後、ご主人の転勤に伴い、家族で東京に逆駐在。帰米後、学習センター開設のため 2004 年グレンデール RC(国際ロータリー5260 地区。その後 5280 地区に統合。)に入会。2008 年に同会クラブの会長に就任。その後、2015 年に同地区にリトル東京 RC を設立し、軌道に乗せたところでグレンデール RC に再入会復帰。ロータリアンとして様々な奉仕活動や平和教育事業を展開している。

******

（留学について）

和田（学友会事務局）：中曽根様、本日はどうぞよろしくお願いします。では、まず留学の経験についてお伺いします。1982-83 年に財団奨学生として、西ドイツのフライブルク大学に留学されていたと伺っていますが、この留学時代についてロータリーの奨学金への応募のきかっけや当時印象深かったことなど教えていただけますでしょうか。

写真：ZOOM でのインタビューの様子

中曽根氏：留学したいと思うようになったのは、高校時代に AFS の奨学制度でサウスダコタ州に留学した経験から“外国語を習う時は少なくとも１年間その国へ行き、その国の四季を体感することが大切である”と感じたことが始まりでした。そこで、東京外国語大学ドイツ語科在学中に政府の奨学金に応募したのですが落選し、どうしようかと思っていたところ、先輩からロータリーの奨学金を教えていただきました。これまで私にとって、ロータリーの印象は「地元の名士ばかりが所属する、とても敷居の高いところ」だったので、私の家族のようにロータリーとは全く関係のない者が交流の機会は持てないものと思っていました。ですから先輩から教えて頂いた時に、「ぜひ受けたい」と思い応募したことがロータリーとのご縁の始まりです。

また、これは今思うと未熟なものですが、ドイツやドイツ語圏へのあこがれがあったのですが、大学で習っていたあるドイツ語の先生が冷たくて厳しく、「ドイツ人は、みんな厳しくて冷たい人たちばかりなのかな。実際に自分の目でみて確かめてみたい」という思いもありました。

そして運良く選抜して頂き、ドイツの南西地方にあるSchwarzwald[1](黒い森)と言われている地域の大学都市にあるフライブルグ大学（Albert-Ludwigs-Universität Freiburg)に１年間留学しました。

現地でまず驚いたのは、ドイツは地域によって訛りがとても強いということです。日本で外国語として学ぶ時には、Hanoverなど北ドイツで話されているHochdeutsch(標準語)を習います。ですから、南ドイツで現地のお友達が話すドイツ語が全く分かりませんでした。私は語学の専門の大学で４年間びっしりと学んでいたので、すごく自信を持って行ったにもかかわらず、言っている意味が分かりませんでした。ドイツは歴史的に地方分権国家と聞いておりましたが、こうしたところにもその影響が出ているのだとドイツに着いて直ぐに感じることができました。

もう１つ記憶に強く残っているのは、欧州には、文化も言葉も全く違う国がひしめき合っていて、これはいつ戦争が起こってもおかしくない、そんなことを肌で感じました。

それまでは、アメリカを崇拝していたわけではないのですが、アメリカってすごい国だなと思っていました。中学１年生からの英語は、イギリス英語ではなくアメリカ英語であったし、アメリカの文化が素晴らしいのだと思っていたわけです。私が留学した８０年代初めは、ちょうど対ソ連の対策としてアメリカが中距離ミサイルを西欧の方へ設置しようと計画していた頃でした。留学のためにフランクフルト空港に到着し、街並みを歩いていた私に衝撃を走らせたのは「Go Home, Yankees」という文字でした。

写真：国際ロータリーハンブルク大会の時に留学先の大学を訪問

[1] シュヴァルツヴァルト（ドイツ語: Schwarzwald）は、ドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルク州に位置する森・山地。

「アメリカ人はヨーロッパでは嫌われているの？」と思い、アメリカ、そして日本は、世界の中、ヨーロッパの中でどんな風に受け止められているのか、どんな地位を持っているのか、そんなことを初めて自問し、そういう目線で物事を見ることができるようになりました。

当時はまだ携帯もインターネットもない時代だったので、日本からの情報は専らテレビかラジオか新聞から入るものでした。もっとも私はテレビを持っていなかったので、ラジオか新聞だったのですが、日本から届くニュースが、日本人の感覚として、読んだり聞いたりしていると何かちょっと違うのではないか？と違和感を感じるようになりました。

ひょっとすると東京駐在の特派員の方は、日本の文化も歴史も言葉も知らない方で、色眼鏡を付けながら書いているのではないだろうか。それならば自分の言語能力を使って、中立で公正なニュースを世界に発信したい、私は将来その道へ進みたいと決意しました。これがドイツへ渡って得た一番の収穫であったと思っています。

勉強はというと、大学では語学専攻でしたが、歴史にも興味がありドイツ史を専攻し、歴史のクラスをたくさん履修していました。歴史の担当の教授が、各地の歴史ある場所に連れて行ってくれました。その中で強く印象に残っているのが、全独クリスチャンの教会が主催し、数日間に渡って行われたある大会がありました。「知らなかったとはもう二度と言わない」が大会のスローガンでした。隣に住んでいたユダヤ人がある日突然いなくなったけれども「どうしたんだろう？」「何があったんだろう」と疑問には思わず、目を逸らしていた。その結果として 650 万人余りのユダヤ人が虐殺されてしまった。ドイツの人たちは 40 年も前に既に「そのような事はもう絶対にしてはいけないと反省をしていた」、そのことは非常に印象的でした。では日本は、日本人はどうだろうかと非常に強く思いました。例えば南京虐殺、東南アジアでの残虐事件などが挙げられます。日本でヨーロッパの歴史を学んでいる時は机上の学問であったのですが、ドイツでは、そこら中に歴史がいっぱいあったので、すごく貴重な体験ができたと思っています。

（地元ロータリークラブへの入会について）

和田：大変充実の内容をありがとうございます。その後のジャーナリズムにつながってくる活動を多くされたのですね。実際、留学後はジャーナリズムの世界に入り、大変ご活躍をされましたが、その後出産を機に退職、しばらく子育てに専念されていた時期がございます。その後学習センターの開設を機に地元のグレンデールＲＣに入ることになります。よろしければこの時入ろうと思われた理由、あるいは入ることについてどのような期待があったのか。それから、グレンデールＲＣに入会され、なんと４年後には会長に就任されます。学友会誌

への寄稿でも、「一にロータリー、二にロータリー、そして、またロータリー」とありますが、当時のご活躍をお聞かせください。

中曽根氏：若い時というのは、やっぱりがむしゃらに働いてキャリアを積む時代だと思うんですね。私もそのように結婚してからも子供が生まれるまで本当にがむしゃらに、一日に 16 時間 17 時間位働いていました。それから家に入って子供を育て、逆駐在を経て、米国に帰ってきてから学習センターを始めることになりました。その間、ずっとロータリーに留学の機会をいただき本当にありがたいと思っていたんですね。その感謝の気持ちはいつも頭の隅にありました。ただその自分のキャリアを積む、子供を育てる時間が必要だったので、入会というところまではいかなかったのです。ただ、学習センターを設立するにあたって、地元社会に入っていかなくてはいけない、と言われたんです。その一策として、何か奉仕クラブに入るようにと。日本ではあまり馴染みがないですが、キワニス[2]というクラブや、ライオンズクラブ、Optimist などいくつか競争相手があって、奉仕クラブに入りなさいと言われたときに、迷わずロータリーを選びました。恩返しをするという気持ちもすごくありましたし、入ってからもその気持ちだけです。私がやっていることはすべてロータリーに恩返しをする、ということです。もちろん地元とかアメリカの社会全体に恩返しをするということもありますが、これまで 2004 年に入って、17 年間私なりに恩返しをさせてもらっているという気持ちが強いです。

クラブへの期待という意味では、ネットワーキングの場ということはありますが、学習センターを始めたから何とか軌道に乗せなくてはいけない、というプレッシャーがあり、あまり何かを期待するということはなかったですね。その前に子供たちが通っていた幼稚園や小学校の PTA 活動を活発にしていましたので、アメリカ人の奉仕活動がどういうものかというものを少なからず知っていた。だからロータリーに入ってからロータリーはこういう奉仕をするんだなと思いました。全く知らない人のために、困っている人のために何か提供したいとか、尽くしてあげたい、生活が良くなるようにしてあげる。キーポイントは友達や親戚や知っている人ではなくて、全く知らない人のために奉仕活動をしてあげる、ということが、やっぱり素晴らしいなと感じました。日本人はなかなかできないことだと思っています。それはすごく偉いなと思っています。

[2] 国際キワニス（Kiwanis International）：アメリカインディアナ州インディアナポリスに本拠地を持つ、民間の社会奉仕団体。

写真：ロス総領事公邸で開かれたリトル東京 RC の創立記念パーティーでの様子

アメリカのロータリークラブは活発に活動していることは、本当に頭が下がるくらい奉仕活動をよくやっています。リトル東京のクラブを創設して基礎を作るために５年間在籍して、７月１日に古巣のグレンデールに戻ったのですが、Covid に関しては、去年はフェイスシールドを寄贈したり、マスクを寄贈したりしています。また、２-３か月前には地域に直に出向いて、地元の WMCA と提携しながら食料に困っている人たちに野菜を袋に詰めて差し上げるという活動をしています。５、６回行いました。あとは、地区のグラントがあるので今もマスクが足りない方々に配っています。

コロナが発生する前にも本当にいろいろな事業をやっていました。どの町もそうですが、グレンデールにも、裕福な人もいれば本当に困っている人も沢山います。グレンデールにはアルメニアからの移民が多く、その二世（親がアルメニアやレバノンやロシアなどの出身）は、貧しい上に英語の単語などをよく知らない。学生向けの辞書、買うと 20 ドル位するものですが、厚さが５cm位あってハードカバーのものを寄贈する。そうすると、子供たちが目をキラキラさせながら、「え、これ家に持って帰って良いの？名前書いて良いの？」というのです。「これもうあなたたちのものだから、名前を書いて良いし、家に持って行って良いのよ。兄弟姉妹と一緒に使ってね。」など言いながら活動していました。また、当 5280 地区は海外での事業も活発なので、アフリカで井戸を掘る事業をしたり。うちの地区特有なのですが、毎年、今年はコロナでできなかったですが、たいがい中南米ですが、地区から 100 人位出向いて現地で奉仕事業をやるんです。私はしばらく前にコロンビアとメキシコに行ったのですが、糖尿病で困っている人の為の医薬品や、教育プログラムをしたり、子どもたちに楽器を届けたり、非行に走らないために放課後音楽やダンスをやりたい、という人のための資材を差し上げたりしています。あとは、孤児院に寄付したりしています。

写真：清掃事業を行っているプラザにて、プラザの名前の由来であるリトル東京に貢献したフランシス・ハシモトさんに敬意を払い、地区補助金で記念碑を贈呈

それから、ぜひこれはご紹介しておきたいのは、ロータリー財団からの「Reverse（逆）」（著者注：地区の活動への財団からのグラントを得ること）を積極的にしています。米国の場合裕福ですから、たいがいは支援というとアフリカや中南米などに行って支援を行うんですが、私は米国内でも特に子供たちに向けて大きな事業をしてあげたいと感じていました。そこで、第１回目は甲府 RC と一緒になって、地元のコミュニティカレッジの日本語学科に補助教材を差し上げるというのをやりました。その後２つ大きな事業をしているのですが、実はこれは東京にある２つの学友中心のクラブと一緒にやっています。平和教育事業で、小学校、中学校、高校の生徒に、「ヒロシマ」や第２二次大戦中の日系アメリカ人の強制収容の話なども入れつつ、他にも世界で起きている虐殺や差別の問題などを入れ込みながら、平和が大切なんだということを肌で感じられるようなものを行っている。直近のプログラムは８万ドルくらいの規模でした。

写真：Reverse Global Grant「平和教育事業」の一環で、コロナ直前に実施校であるパロス・ベルデス・ペニンスラ高校の生徒約 400 名を「全米日系人博物館」見学

（地区ガバナー・デジグネートへの選出）

和田:本当に様々な活動をされているのですね。こうした活躍がまさに認めらて、ということだと思うのですが、国際ロータリー5280 地区のガバナー・デジグネートに選出されたとお聞きしました。それだけでも大変なことかと思いますが、加えて女性であり、また米国では外国人がガバナーになる、このことの受け止め方や反応、そしてガバナーとして地区でどのような活動に取り組んでいきたいかなど、教えていただければと思います。

　ちなみにですが、これは参考までですが、国際ロータリー全体でのロータリアンの女性比率は２２％、日本は４％です。さらにいうと山静学友会は約６割が女性です。

中曽根氏：アメリカでは女性の比率は高いです。私の地区は 36%です。確かにこの世の中半分は女性なのですからそれからいうと少ないですが、世界平均、あるいは日本から比べるとはるかに高いです。さらにガバナーに関しては、実は私がガバナーになる年に、すでに５人続けて女性がガバナーなのです。こんなに長い間女性をガバナーにするのかとみんな思っていた

ところ、この地区のすごいところは選んでしまったんですね。地区でのガバナーの選出は、基本的にすべて自薦です。ガバナーになりたい人が自ら立候補してそれを審査して選出されます。選考には①エッセイ、②履歴書、③30 分くらいの面接があります。この際、選出について国際ロータリーから、ガバナーの選出にあたっては応募者の中で一番優れた人を選びなさい、という通達が来ているそうです。それに従うか従わないかは地区の裁量ですが、私の地区については既に４人も続けて女性が選出されている中で選んでいただいたということを見れば、そのことからも女性であることに関わらずしっかりと審査して選んでいるのではないかと思います。

今回ガバナーに立候補するにあたり、初めて主人が OK を出してくれました。私が選出されたときは５人の候補者がいまして、そのうちの一人は３回目の応募、また他の一人は２回目の応募で、しかも先ごろ 25 万ドルもの寄付をロータリー財団にしたばかりなので主人はこの人が受かるよと言っていましたし、私もそうかもしないなと思っていました。こうした中で、今回私が初めての立候補でガバナーに選出していただいたのは、新クラブ創設委員長のようなお役目をいただき新しいクラブを１つ、サテライトクラブを３つ設立し、約 60 人の新会員を私の地区に迎えることができたことなどが評価されたのだと思います。もちろん他にも 2012－13 年の会長の田中作次さんの使節通訳をさせて頂いたり、他にもいろいろあると思いますが、現在会員増強というのが最重要課題となっているので、たぶんそれが一番評価された理由かと思っています。

ガバナーとしてやりたい事については RI 会長をされた田中作次さんが推進した当時のテーマでもあった「PEACE THROUGH SERVICE」（奉仕を通じて平和を）のガバナーバージョンをしたいと考えていています。先ほどご紹介した「reverse」でやっている米国内への奉仕活動、これを地区規模で大々的にやりたいと考えています。それから、もう一つは「DEI」というのを聞いたことがあるでしょうか。「Diversity, Equity, and Inclusion」というもので、少し前にあった黒人のフロイドさんが白人警官に首を抑えられて亡くなった事件から、最も論議されているテーマです。例えば、黒人と白人を同じレベルで比較する、といった際に、そもそも両者は出だしが違うんだから、そのスタートラインを上げてあげた方がいいんじゃないか、ということだと思っています。これは、私も米国でマイノリティですが、日本人は一世の方々のおかげで、勤勉で正直で、という評判をつくっていただいて、私自身差別を受けた、という経験は、１回しかないです。その差別ももしかすると勘違いかもしれないませんが、例えば銀行で日本人だからと言って口座が作れないとか、そういうあからさまなものは経験したことがない。でも、特に今だと中国系の女性が路上で後ろから突き飛ばされる、そういう事件がいくつも起こっている。そういう意味で、まずはロータリアン自身から自分た

ちを振り返って、意図しない無意識の差別というのはまだあると思っていて、そこにもう少し焦点を当て、それを是正するようなしっかりとしたプログラムを立てて取り組みたいと考えています。

それから、最後に私は日本の 2620 地区の出身ですから、地区と地区の友好関係をさら深めていけたらよいと強く願っています。

（最近の社会の変化とロータリークラブについて）

和田：ありがとうございます。コロナ禍での社会の変化のようなものにもすでに話が及んでいますが、次はこうした社会情勢の変化のようなものについてです。ソーシャルディスタンスという中で、特に奉仕活動で face to face が非常に重要なのかなと思いますが、今後の状況の中でのクラブの活動がどのように変化していくのか。それから、今後若い方の巻き込みをどうするのかは共通の課題ではないかと思います。例えば、e クラブのような動きもあります。また、学友会からの立場からすると、学友として活動していらっしゃる方々も、どういうようにクラブと関わっていくことができるか。これらの状況を踏まえ、今後の活動をどのように変化させていくのか、というあたりについて教えていただければと思います。

中曽根氏：うちのクラブでは、地区では 9 割がたそうなのですが、すでに例会は ZOOM 会議です。オンライン会議になってすごくいいなと思ったのは、世界各国からゲストスピーカを呼べる。旅費とかお支払いしなくても招待できるのが凄いなと思っていて、たぶん私達、私のお友達もみんな今後はハイブリッド形態、オンラインでやる場合と対面でやる場合とハイブリッドで会合を行くうんじゃないかと思います。

もちろん、対面がいいという方もたくさんいますし、先ほどお伝えした地区の毎年恒例の Humanitarian caring Trip という中南米に行く奉仕旅行は、もちろん対面でしかできないのですが、それは再開できたらいいなと思っています。もしかしたら来年の春に行けるんじゃないかなとすごく期待しています。

ひとつ皆さんにお伝えしたいのは、私も自分を振り返って、ロータリアンになったのが 40 代の後半。50 歳の時にクラブ会長でした。その前は、キャリアと子育てで精いっぱいだったのでそこまで気持ちのゆとりもなかったし、ただ振り返るとそういう時期があるべきだと思います。実際二世経営者とかでもなければ、それこそ自分の体一つで事業をしたりとか、キャリアを積みたいといった時には没頭する時期が必要だと思います。ただ、そうはいってもやっぱり take だけじゃいけないと。ある時期に恩返しなくちゃいけないと、私はすごく思い

ます。人間として。それが直接お金をくださった方にじゃなくてもいいけれども恩返しをする。それが大切じゃないかと。

先ほど少し触れましたが、東京の 2750 地区の米山友愛 RC というのは 10 年前に、梅吉さん、米山財団からいただいた奨学金で日本に留学された方が中心に始めたんですが、元留学生がほとんどです。いわば学友会から出てきたクラブという感じです。それが、数年後に e クラブをつくりました。その二つは親子みたいな感じなんですけれども、その米山友愛 RC と米山友愛 e クラブが手に手をとって、もの凄く活発に奉仕活動をしています。そういう例もあるので、皆さんもぜひ考えて欲しいなと思います。

私も実はうちの地区で新クラブ創設委員長と学友会委員長をやっているんです。私の目標は今年度末までに国際ロータリーから承認されること。その学友会として。その次の目標は来年、再来年、少なくとも私のガバナー年度末までには学友会中心のロータリークラブをつくりたいです。で、2620 地区でもぜひ考えてもらいたいなとおもいます。

これはわたしがグレンデールの会長年度の時にロサンゼルスで国際会議があった時、パストガバナーの現高野孫左ヱ門さんがいらして教えてくださったものですが、「ロータリーって、差し上げるより頂く方がずっと多いんですよ」と。その、自分がお金を寄付したり奉仕をしたりするんだけども、でもねもらうものが多いんだと。わたしは 17 年間ロータリーの会員になっていて本当にそうだなと思います。他のロータリアンのお友達と一緒に奉仕をする中で、人間としてすごく成長できたなって思います。もちろん指導者としても成長させてもらえたなっていう風にすごく思います。

和田：ありがとうございます。逆に宿題をいただいてしまいましたが、本当に貴重なお話をたくさんいただきました。それでは、既にもう色々とメッセージをいただいていますが、最後に学友会誌ということで学友のみなさんへのメッセージをおねがいします。

中曽根氏：私、さっき皆さんに言ったことですけども、今じゃなくてもいいですからいつかロータリアンになってください。ロータリーとコミュニティに恩返しをしてあげてください。これだけです。

（以上）